君の幸せを信じて

21144444

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
君の幸せを信じて

【Ｎコード】
Ｎ２７６３Ｔ

【作者名】
２１１４４４４

【あらすじ】
彼女にプロポーズをしようと思い、結婚指輪を買った帰り、ホームの上で突き飛ばされる、後ろを振り向けばそこにいたのはまさにプロポーズしようと思っていた彼女、だが様子がおかしい、線路へと落ちれば、ガタンゴトンという電車音が近くから聞こえ、逃げられないことを悟った。そして目を開ければそこにあったのは真っ白な世界、そしてそこにいた女性、――そしてこの世界が危機に瀕していることと、彼女がおかしかった理由を知らされ、俺は戦うことを決心する。

プロローグ1（前書き）

…正直gdgd感をビンビンと感じるのですがどうしましょう。
物語のプロローグは丁寧に、なんて考えて飛ばし飛ばしでやらないようにやっていたら裏目にでた気がする。

プロローグ1

――現実と非現実というのは、本当に薄い壁でさえぎられてるに過ぎないのだろう。

27歳、会社員、名前は…『錦戸彰(にしきどあきら)』
どこにでもいる、だたの青年だった。
漫画で、『どこもにでもいる』なんてただのフラグ、だが、たしかに俺は普通の青年だった、中年へのカウントダウンにおびえるただの青年。

電車のホーム、俺はポケットに手を入れて一つの箱を握っていた。
高級そうな箱、外に出しているのは、いつでも出せるように。
幼馴染、やっとの思いで告白し、付き合い始めて数年、俺はやっとプロポーズというものを決心したわけだ。
一度ポケットに手を突っ込み、あることを確認、ちょっと安堵をして戻す。
そんな行為をここに来るまで何度つづけたかわからない、俺の心臓は痛いくらいにバクバクと音を鳴らしている。

「ふぅ…」

緊張のせいか、いつの間にかでていた汗を拭く、電車のホームにあるスピーカーから『プッ』という電子音が聞こえ、声が流れ出す。

『黄色い線の内側に――』

よく聞く言葉、電車通勤のサラリーマンだから当然だ。
電車が来るのを黄色い線の内側に立ちつつも見てみる、もうすぐだ

ということがわかり、心臓の鼓動が大きくなった気がした。

…そのときだった

背後からの力

ドンッという音が鳴る

――衝撃、その瞬間にブワッと冷や汗が流れ出るのを感じた、力に逆らわず、いや逆らえない、俺はコンクリートでできたホームから躍り出るしかなかった。
俺は落ちていきながらも、後ろを振り向く、なぜそうしようと思ったかはわからなかった。

――そこにいたのは

まさに俺が――プロポーズしようと思っていた、幼馴染。

「ま、ゆ…き…」

唖然としながらも、声を出す、『真由紀』、それが彼女の名前。
その声を発した時に、彼女はハッとしてこちらをみて、呆然とした。

「え…？」

驚愕の声、その声により、故意に俺を狙ったというわけではないということは理解できた。
――それだけで少し救われた気分だった。

ガタンガタンという鈍い音。

鉄の感触
木の感触
石の感触

そして、振動の感触
死刑台が向かっているような気分。

それを感じて

――逃げられないのを悟った。

目の前の世界が真っ赤に染まる。

…

……

「う…ぁあ」

うめき声を上げる、そのうめき声で生きていることを感じ取り、目をあける。
だがそこは期待したような景色じゃなかった。
寸前で止まった電車もなく、驚いている幼馴染兼彼女でもなく、あったのは真っ白な世界。

「ここが、死後の世界？」

真っ白で、真っ白で、どこが壁だか、どこが床だか、どこが天井だかまったくわからない。
この世界をみていると、不安定になってくる。
それから逃れようと目をつぶってみる、目の前の世界は真っ暗にな

ったが、まぶたを閉じような感触はなかった。
だが、世界は真っ暗になっている、それが怖くなって、閉じてもいないまぶたを開ければ、真っ白な世界があった。
だが、先ほどとは違う、そこには一人、人がいた。
水色の透き通るような長髪、同じように透き通るようなきれいな肌。
――女性の服にはあまり知識はないが、白い綺麗な服だと感想はでてきた。
本当にこんな女性がいるのか、信じられないほどの女性。

「あなたは…？」

声がでる、のどが震える感触もない、だが声は出た。
声をだせば、こちらをじっと彼女は見つめてくる、そして一歩、また一歩と近づいてくる。

「あなたは死にました。」

率直な言葉、普段言われれば、おかしいやつとか電波とか、そんな言葉がいえるのだろう。
だが今は違う、今は普段というものではない、そしてその言葉は俺の否定し続けていた現実だった。
その現実を突きつけられて、一瞬放心したが、すぐに我を取戻し、震えない喉に底知れぬ恐怖心を抱きつつも、質問をしてみることにした。

「…ここは、死後の世界？」

聞きたいことを直に聞いてみれば、女性は横に首を振り、口を開く。

「死後でも生前いた世界でもなく、ここはその狭間の世界」

「狭間の世界？なんで俺がこんなところに…」

「それは私が読んだから、お願いがあるの。」

「…お願い？」

「あなたに、魔王を倒してほしい。」

…その言葉に若干の放心、嫌な予感はしていたが、ジャストミート、馬鹿にする気はさっぱり起きない上に、どこかのＲＰＧかよという突っ込みも起きない。

それもいまおれの状況自体がおかしいからなんだけども、しかし、いきなり魔王を倒してくださいといわれて、どこかのＲＰＧの主人公見たく頷けるかというと、そんなわけはない。

一般ピープルである、自称でしかないが常識人である、そして平和ボケジャパニーズである、そんな俺がファンタジックに剣を握って魔王に立ち向かうことができるかと問われれば絶対に否だ。

人殺しもしたことないくせに、グロ画像で吐きそうになる俺に何故そんなことを願うのか、この女性がわからない。

「なんで俺に？」

だからこその質問、その質問に女性は小さく頷き、返答してきた、

「あなたに関係があるから。」

「関係…たぶん、この場合死んだことに関する場合ってことなんだよな？」

女性はまたも小さく頷く、そしてちょっと考えて…すぐにわかった。

「…真由紀の様子が変だったな。」

「はい、…魔王が関係しております。」

「っ…な、なぁ、どんなところで関係してるんだ？もしかして魔王とかの精神汚染とかそんなことを言うのか？」

「やっていただけるので？報酬はなんでも差し上げます。」

「それはっ…話を聞いてからだ。」

そう返答した時に、コホンッと女性が咳をして、俺をまっすぐに見つめてくる。

吸い込まれそうな瞳、そのことに若干たじろぎながらも、まっすぐに見つめなおす。

「じゃあ――」

そして俺は、問いを開始したのだった。

プロローグ1（後書き）

誤字報告・感想等ありましたらよそいくお願いします。

まえがきでも言いましたがgd gd感というものは書いてきた作品でも最初のほうはありましたが話が進めばなんとか読めるかなって感じになってきたのでがんばって書いていこうかと思います。

プロローグ2（前書き）

こんにちは
文章で軽くスルーされてるからわからないと思うけど、この主人公実をいうと絶対的不利でスタートなんだ。
最強主人公無双が見たかったら少々違うかもしれない。
みたいってひとは、期待に添えないかもしれない、

プロローグ2

「…あなたは何者なんですか？」

「私は女神です。」

さっそく質問、やはり最初はご本人からの紹介だろうか、と思い、この女性について質問してみたが、帰ってきたのは『女神です』…おそらく嘘ではないんだろう、この美しさといい、この世のものとは思えないからな。だからこの質問はこれで終わりにしよう…

「じゃあ、なんで魔王とやらを倒さなきゃいけないですか？そして真由紀との関係なんですけど。」

そう質問すれば、コホンと喉を整えるために女神は咳をする、そしてコチラをまっすぐ見てくる。

「魔王とは、あなたの考える魔王と同じといえるでしょう、物語で敵としてでてくる最後の敵、この魔王はすでにいた世界のほとんどを手に入れる算段はできているのです。そして、手に入れた後のことを考え、思いついたのが『異世界』、そして異世界を狙った――。そして手下を送る…ですが、異世界に行くと肉体がもたないのです。」

「…なんで？」

魔王…俺が戦うことになるであろう、敵。
同じといったら、よくあるＲＰＧと同じということだろう、そしてその魔王は俺側でいう異世界を手に入れる算段はすでにつき、異世

界を狙ったという…まぁそれはきっかけさえあればやることではあるだろう。だが肉体がもたない？どういうことだ。

「歴史上、異世界にいこうとするものはいました、ですが異世界に行くとすれば、二つの水の入った水槽に穴をあけ、行き来をすることと同じ、すぐに修復はされど、水は多少なれどもでていってしまいます。…この水を、世界そのものだと思ってください、『水』『光』『闇』『風』『空気』『土』『自然』『人』多種多様なデータを総合して水と思ってください。…出て行った水が、もしかしたら空気のデータだったら、どうなるでしょう？」

「…その出て行った人の世界の人々が死ぬ？」

「はい、一つを失えば、多種多様なデータで、まるでトランプタワーのように不安定ながらも安定して作られる水はガラガラと崩壊していき、世界が死滅します。そうすれば人は簡単に死ぬでしょう。だからこそ神々は世界を存続させるために、世界と世界の間に膜を作ったのです。」

「…それで、肉体がもたない理由がその膜なわけか？」

そういうと、女神はコクリと頷く、その答えだけで十分だった。これ以上穴をあけられれば、『その世界の人間』が生きるのに必要な『何か』がでていってしまうのだ、だからこそ膜を張り、肉体を消滅させる。そしてその理由は、

「その膜は肉体を消滅させる、『異世界に行けたものの存在』というものを消滅させ、無理やりにも『実例のないもの』として作り上げるわけです。」

実例、行ったことがあるという存在自体を消滅させること。
それにより、ありえないことと勝手に常識にされ、誰もやらなくなる。

「だったら、魔王だって消滅するんじゃないのか？」

「…肉体があっても、精神はあります。」

「ーーー」

話が、突拍子もなかった。
これはオカルトの分野だ、精神とか、そういうものは肉体がなくなっても存在し続けるなど。
だが否定はできない、否定したら今この状況も否定しなくてはならない。

「精神に干渉し――心を乗っ取る。そう、あなたの大切な人のように」

「そう、か。」

事実、教えられても現実味はなかったが、ほっとしたような、悲しいような。
…あれ？ちょっとまて、真由紀のやつ、俺を殺したってことになるんだよな？たとえ魔王の手下を送ろうとも、俺を…

「警察に捕まってないのか？」

「捕まっています。」

そうか、そうだよな、…当然だよな。
話を聞いて、罪はないといっても知っているのは俺だけ。
「報酬はなんでもといったよな？」
「はい。」
「過去に戻すことはできないのか？」
「…あなたを助けることはできません。」
「それは、魔王を倒す俺がいなくなるから？」
「…はい。」

「じゃあ、さ。」
「…はい。」
「漠然とした――願いでもいいんだよな？」
「…はい。」

「じゃあ、アイツ救ってくれ、俺がんばるから…。」

「はい。」

ハッキリとした声、先ほどまでのように前に空きがでるような話かたではなかった。
…だからこそホッとしている。

「あなたの肉体を、世界に飛ばした後に構成します。」

「穴によりデータ流出はあるのか？」

「最小限に抑えます。」

「肉体は、どんなものなんだ？」

「強いです。…それで勝てるはずもありませんが。」

「…なんで？」

「魔王は、強いだけでは倒せない。…だから」

「努力を怠るな、じゃないの？」

「その通りです。」

頷かれる、強く強く、その大切さが伝わる。
俺はそれをみて頷き返す。

「俺…俺、がんばるよ。」

ギュッと手を握る、箱にはいった結婚指輪は大丈夫だろうか、なんて関係ないことを考える。
箱は血で汚れてしまっただろう、だけど中身は、きれいだといいな。
真由紀にもっててくれるとうれしい、俺はもうあそこには戻れない、かといって一緒に行こうなんて巻き込むわけにはいかない。
好きだからこそ一緒にいたいけど、好きだからこそ巻き込みたくない。
そんな矛盾した感情が渦巻いているけど、結論はやはり一人でいくことだった。

楽しかった、あぁ、楽しかったさ

走り回って、笑い合って、電車に轢かれたときは見たことがなかった走馬灯が駆け巡る。
あの時は真由紀を考え続けていたからだろう。
そして、この世界の俺が死ぬことを理解できたから、今見えたのだろう。

「…ぞ」

声がかすれ、まともに声が出なかった。
だからこそ、再度息を強く強く吸う。

「いっくぞぉぉぁあぁぁぁぃぃぃぃぃぃぃぃ」

声が裏返って変な声を出してしまった、しまらないなんて苦笑しながら、俺は目をつぶる。
女神の手が肩に触れる。

「いきます」

…まるでジェットコースターの、最初の部分のためが終わるときのように、ガクンッとした浮遊感を感じた。
真っ暗といった言葉では表せない黒…喪失感、たくさんの感覚が襲ってきて、俺は、世界から消えるという感触を味わった。

――俺の姿は、もうすでになかった

プロローグ2（後書き）

「……」

声が、出てこない。
手の中には、高級そうな箱をもった女性は、ベットの上にすわり、呆然と天井を見ていた。

「おかしいよ…」

かすれた声で、女性はいった。
――彼女の名前は『真由紀』、人を一人、それも大切な人を殺してしまった女性。彼女自身、操られただけだから覚えてなどいないけれども
だが彼女は警察から釈放されている、警察の人々はまるで何故自分を捕まえたのかわからないといった表情をしている。
そして『なぜか渡さなきゃいけないような気がした』といわれて、渡された箱には指輪が入っていた。
真由紀は、彼のもっていた箱を思い出す、おぼろげながらも覚えている。
後ろからつけて行って、驚かそうと思っていたときに彼が握っていた、大切そうにもっていた箱。
開ければ指輪、彼がどうしようと思っていたのかなんて簡単に思いついた。
だから、その時は崩れ落ちて泣いた、警察の人々があわてていたけれど、それも気にせずに泣き続けた。
そしてどうだろうか…今は、そんな涙も止まるほどに、彼女は呆然としているしかなかった。

彼の家にいって、謝ろうとした、だけど彼の両親は、まるで彼のことなんていなかったかのように話す、『何故謝るの？』といわれたときには何も言えなかった。
ご近所さんの付き合いがあった程度になっていた。

「おかしいよ…」

それでも彼女はしっている、彼の存在を、そして彼がいたという証拠ももっている。
指輪を取り出し、左手の薬指にそれを通し、ギュッと手を握る。
口ずさむのは、結婚式のメロディー、それを続ければ、嗚咽に追って阻まれる。

ふと、気配を感じる、すぐに前を向くと、そこにいたのは――女性。

「――誰？」

今の時間を邪魔してほしくなくて、強い口調でいった、だけれどもその女性はこちらに歩いて、手を出す。

「あなたを、救いましょう。それが彼の願いだから。」

「救う…？彼…？」

第一話『異世界』（前書き）

感覚的には、ほのぼのながらも、途中シリアスって感じですかね。
書き方について要望があればいってくださるとうれしいです。
アドバイスもいただけたら…
正直文章作成能力というものがさっぱりないのですが、物語を書くことが好きなので、もっとうまく文章が書けたらな、と思います。
読みにくければ、一行一行に空きをつけてもいいですし…

第一話『異世界』

落ちていく、落ちていく、落ちていく。
喪失感が激しく体を抜けていき、次の瞬間に無くなった。
カチリと何かパズルが当てはまったかのように底知れぬ達成感が巻き起こり、すぅっと息を吸う。
都会というコンクリートジャングルでは、薄くしか感じられない土の匂い。
目を開けて隙間から入ってくる光に少しくらっとするが、すぐに慣れてきたのでちゃんとあけた。

「…本当に来たのか。」

ボソリとそういった、そう聞いたときに、あぁまだ実感がわかないのかと苦笑しつつも、一歩歩いてみる。

「はじめのいっぽ。」

子供のころに何かの遊びでそんなことをいったっけ、そんなことを思いつつ、空に向かって伸びをする。
そして俺は腕を見てみた。
――何の変哲もない腕
強くするといっていた気がするが、それをみて本当に強くなったのかという心配をする。
ただでさえもうすぐ征服しちゃいます宣言を女神様から頂いたのだ、圧倒的に不利だ、それでレベル1からとかはっきりいって死ねと言われているようなものだ。

「強くなってるのか？」

見た目で判断はやめよう、だから俺は強く地面を蹴り上げ、走ることを決めた。
速さ、持久力、それを最初にはかることに決めたのだ、途中岩でもあれば殴ってみるのもいいかもしれない。
そう考え、蹴り上げる、その次の瞬間――何もかもが吹き飛んだ。
――いや、蹴りだけで吹っ飛んだわけじゃないんだ、そんな気がしただけ。
そう、それほどまでに自分がぶっ飛んだのだ。

「うぉおおおぅぅ！？」

空中に体が投げ出される、だが体はすぐに体制を整え、地面に足をついて踏ん張り続ける、摩擦を利用して無理やりにも止める、数十センチもすれば威力は殺されて止まった。

「……」

一瞬で精神がガンガン削られた気がする。

「いつも通りじゃダメなのか？だったらななめじゃなくて限りなく低い角度の斜めでいこう」

体を低くし、なるべく地面と平行に力を加える、再度爆発音を指せながらも、今度は吹き飛ぶことはない。
よし、心の中でガッツポーズを浮かべながら加速を始めた、今度は限界速度。

「速い、速い速い……ハヤッ！？ちょ、止まれ！とまっ！？」

限界速度を調べていれば、異常な速度を感じて恐怖し、止めようと足を前に出して、強く地面を踏み込む、

「ぜぇっはぁぁあああ！」

雄たけびをあげる、それほどまでに怖い、ありえないだろこの速度――

「どぅっはあああ！？」

踏み込んだ足は地面そのものが耐え切れなくなったのだろう、ズボッと深くまで入り、それを軸にして俺は前へと体勢を崩し…頭から突っ込んでいく。

「げぺぶっ？！」

クレーターを作り、顔面が突き刺さる。

「痛い…わけではない。」

ペッと土が口に入ったので吐き出す、見てみれば服が汚れた程度。そういえば服はどんなだろうと思ってみてみれば、別に変哲もない黒いTシャツとジーパンだった。

まぁとりあえず、化け物具合は証明されたわけだが…

魔王は、これでも勝てないわけだ。

なにそれ、人類が倒されるって普通に言われてたけど、理解できる。

――これは無理、普通じゃかてない。

「っと…そんなことをやっている場合じゃない、このままじゃ飢え死にだ。」

そう思って見回せば、草原草原草原草原草原…土の道があった。
こういうのを地平線というのだろうか、なんて思いながら俺は高いところはないか見回す。
土の道があるということは、人が通る道があるということ、街があるのだ、だがどちらにいけばいいのかわからないために、上から見て、近いほうへといこうと思ったのだ。

「あった。」

高い場所を見つける、ちょっと森を抜ければあそこの丘へと到着するだろう。
そう思い、走り出す、森へ差し掛かり、木々を抜けて走り続けて…こける。
木の根っこに足を取られてこけたらしい、痛くなんてない…ただ、なんか負けた気がした。

「運動不足かな…」

会社員は結構走るんだけどな、なんて思いながら起き上り、服の土を払う。
そしてすぐに走り出す、これも訓練みたいになるかもしれない。
下をチラチラとみながら、根っこを見分けてあいている場所に足を置き、走る。
数度足を取られるが、最後のほうには取られることはなく、そのまま走ることができた。

数分走れば、丘へとたどり着く。
結構高い、空気が澄んでるのがよくわかる、広大な大地がよく見える。
アルプスの少女ハイジというアニメでこういう光景は見たことあるな、と思いながらもぐるりと見回せば、城と街がみえた。
まるでおとぎ話のような城だ、…いやおとぎ話の城といえども実際の城から作り上げたものばかりだろうから当たり前だろう。

「まずは職だな。」

日本人は働きすぎだ、なんて言われているし、そんなこと言われても文化の違いだろ、なんて思っていたが、この時ばかりは日本人の血を感じた。
これから世界を救うとうのに、考えることはそれかよと思って苦笑する。
だが、右も左もわからないのだ、こんな不安な世界で、少しでも適応するには仕事というところから交流関係を広げるべきだと思う。

「さて、いくか。」

どっかに求人広告とかやってないかな、と思いながら足に力をためていっきに走り出す。
丘にはすでに俺の姿はない。
城に向かって全速力で前進を開始した。

第一話『異世界』（後書き）

…あれ？５０２３文字？多すぎじゃない？と思ったので分けます。

第二話『アレシュバーグ』（前書き）

分けました、分ける前の話を見た方は申し訳ありません。

第二話『アレシュバーグ』

十数分程度、全力疾走とは言わないまでも、少しも疲れていない自分がいた。
街、というか城下町といったほうがあっているだろう、その城下町へと入る門の前へとくれば、当然門番がいる。
少々警戒をしてこちらをみてくる、ちょっと前に全速力はやめて歩いてきたのだ、俺がすごい速さで来ていたということは気づかれていないはず。
警戒を解くためにニコニコと笑いながら近づく。

「止まれ。名を名乗れ」

そういわれて少し考える。
彰…じゃだめかもしれない、いかにも西洋風だ、西洋風の名前を言ったほうがおかしなやつとは思われないと思う。
ちょっと考えて

「アレンです」

そう答えた。
アしかあってない上に安直だと思った。
だけど俺名前とか作ったことないからな。

「このアレシュバーグに来た理由はなんだ？」

どうやらこの街はアレシュバーグという名前らしい、言いにくそうで言いやすい名前だな。

「出稼ぎにきました。」

嘘ではない、そういうと門番は納得したようにうなずく。

「あの…入国にはどうすればいいんでしょう。」

そう問えば、門番は近くの石でできた小さな小屋へと連れてきて、俺に羊皮紙を渡してくる。

色々と書いているが、読めない。

「こちらに血を落としてくれませんか。」

悪魔の契約かと思ったが、入ることが先決だ。

だが…少し不安だ、個人情報とか出てこないだろうか、転生者とかでて異端者認定されたら終わりだ。

そんな俺の不安を感じ取ったのか、門番は口を開けた

「血の契約です。契約すれば現在位置を示すことができます、効力はそれのみ、情報などもある程度は読み取りますが、身長体重程度で、個々の尊厳などに対し、辱めとなるようなことは何一つ読み取りませんのでご安心ください。行ってしまえば犯罪やスパイなどに対する予防みたいなものですね。」

そういわれて安心して血を落とすことを決める。

仕方ないから親指を噛んで血を流そうか、と思いたち…すぐに止めた。

「…」

力加減がわからない、間違えて肉ごと噛みちぎるとかないよな？
そのことを思えば、ちょっと怖くなって、門番をみた。

「な、ナイフとかありません？」

そういってみれば、「あ、申し訳ありません。」といって引き出しからナイフを取り出し、渡してくる。それを握ってそぉっと親指を切り…切れない。

「あ、あれ？錆びているんですかね？ちゃんと清潔に洗っているんですが…新しいものを。」

そういってあわてて引き出しを開けるが、見つからないらしい、ちょっと焦っている。
…なんか罪悪感が沸き起こる。

「あ、もうあれですね、噛みますとも。」

罪悪感がわき続けて、もうやるしかないと思って親指を噛む。
成功…少々だが血が出てきた、ホッとして息を吐くと、それを羊皮紙へとグッと押し当てる。

「なんだかすみませんね…」

そういって申し訳なさそうにする門番、心へと罪悪感が矢になって突き刺さり続ける。
門へと案内されて、小さな穴に向かって、「開聞！」と門番が叫ぶと、ガリガリと音を立てて門が開く。

「どうぞ。」

「ありがとうございました。」

お礼をいって、一歩を歩く。

「（そういえば、あの血でわかるってことは、科学とか魔法とかあるのだろうか）」

そんなことを思いながら歩いていくと、街の光景が見えてくる。
俺の予想はあっていたらしい、城下町の大きな通りをみれば、目立ちはしないものの、ものが浮いているなどといった光景が見れる。
科学では装置が必要だが、そんなものはなさそうだ、つまり魔法があるということ。
煉瓦造りの家々をみても、到底科学が発展した都市だとは思えない。

「魔法かぁ。」

異世界だな、なんて心の中で思って、すぐに歩き出す。
掲示板とかあれば、職募集してるかもしれない。
――これでも会社員、この就職氷河期と呼ばれるこの時代で内定をＧＥＴした男だ、面接には自信がある。
…そんな能力必要かはわからないけど
面接マニュアルは熟読したぞ！

歩き続けると、やはり異世界、髪の色は色とりどり、蛍光色だらけ。
金髪や茶髪が多いのはいいのだが、緑やピンクがある。
本人に行ったら怒られるだろうが、目が痛い。
そう思っていると、視線を感じる、そういえば歩いているのに、俺の髪色である黒がいない。
――おそらく珍しいのだろう。

そんなことをもいながら歩いていくと、掲示板を見つけたので、小走りで走って近づいてみる。
たくさんの紙、きっと求人広告があるだろう。
掲示板に手を付けて、求人広告を探し――固まった。

「…」

…文字が読めない。

「文字が…読めない…だとぉ…」

大切なことなので二度言いました。
なぜか抑揚をつけて行ってしまい、それから呆然とする。
ジッとみつめていても何も変わらない。文字を勉強する？今からやっても飢え死にだ。

そんなときだった

「あ、あの…どうかしましたか？」

声をかけられる、声をかけてくれたということは親切な人だ。
つまり…俺はこの人を頼るしかない。
振り向き、みるといたのが銀髪少女、おどおどしながらもこっちを心配そうに見つめてくる。
その光景に、実に心優しそうな雰囲気を感じる、…いまはそんなことはどうでもいい
頭を地面にこすりつける、土下座というものだ。

「ふぇぇえ！？どうかしましたか！？」

さすがにやりすぎだったのだろう、ものすごいひきつり驚きの声を上げてこちらをみてくる。

「文字を…求人広告の文字を呼んでください…」

「え、は、はい、喜んで！」

俺がそういえば、少女は何が喜んでなのかさっぱりわからないが、一応は了承してくれたらしい。
運がいい、心優しい少女に見つけられた今の俺は最高に運がついてきている。

少女は掲示板へと近づくと、「えっと…」なんてつぶやきながら掲示板をみる。

「ひとつめは…『配達』条件：物について問わないこと、生死に関しては保証なし」

「却下します。」

当然である、怪しげってなんなのさ、たしかにえり好みなんてできないけどさ、仕事の関係は信頼の元築き上げるものなんだよ、死亡フラグが立ちすぎて怖いわ！
信頼も何もないうえにそういうのは『運び屋』を名乗る人にやらせなさい！

「あ、そうですか…二つ目ですね、『荷物の運搬』、条件は力が強い…無理ですかね？」

「見た目で判断してもらっては困ります。これでも私すごいです。」
「へぇ、そうなんですか、へぇ」
「…棒読みですか。」
ものすごい温かい視線をいただいた。
「では三つ目…これがいいと思います。住み込みになりますが、城内や庭の掃除…掃除係です。」
「結構いいですね。」
住み込みという部分が特にいい、金に問題はいっきに解消されるし
「私もそう思います、えぇっと場所は…城の前の門番に話しかければ案内するそうです。」
「はい、あ、ありがとうございます、後々お礼はしますから。」
「いえそんなのいいんですよ、…あ、そういえば城への道のりはわかりますか？」
「…」
「…」
「…わ、わかりませ、んなわけないです！」
「さて、こちらです。」

「…ありがとうございます。」

なんともかっこうがつかない、というか格好悪い

「あ、そういえば自己紹介しておきます。フィリア、フィーって呼んでくださいね？」

「あ、アレンです。」

彰と言いそうになったが、ちゃんとここでの名前をいう。

「アレンさんですね！、ではついてきてください。」

そういわれて、俺はフィーの後ろを歩き始めるた、

第三話『職業：勇者兼見習い掃除係』

「アレクさんはどうしてこの国に…？」

「え…あ…えっと旅です！」

後ろを歩き、石が引きつめられてできた道を歩き続けると、フィーが声をかけてくる。

それを少々不自然ながらも返す、旅、外からきた理由はこのぐらいしか思いつかなかった、自分の発想力の乏しさというものがうらめしい。

「旅…？そんなに軽装で大丈夫だったんですか…？」

「た、食べ物とか底ついちゃったし、あとは宿においてきたんだよ！」

ごまかす、正直これ以上追及されたらボロが滝がごとく出てくる気がする。

どうしよう、これ以上の追及はされたくない、だったら――

そう思い、歩く速度をさらに加速させる。ズンズンと前へ進むことにした。

「あ、待ってください、前の路地をまがったほうが早いです。」

…止まり、羞恥心で顔が赤くなるのを感じる。まるでビデオの巻き戻しのようにして路地のちょっと前に戻り、曲がる。

そんな俺をみて、フィーはクスクスと笑い、その声を聞き、さらに顔が赤くなった気がしたが、ちょっと加速して、それによってできた風によって無理やり顔を冷やしていく。
それから2、3回ほど会話を続けていれば、路地が終わり、家々によってさえぎられていた光もさえぎるものもなく、本来の光の強さで目に入り少々まぶしい。
まぶしさに目がくらんだが、すぐに戻ったので目をちゃんと開けて目の前をみる。

――そこにあったのはなんとも幻想的な風景

インターネットなどで、幻想的な風景と検索すればでてくるような風景、白い城、そして壁が光を反射してキラキラと光る。

「うわぁ…」

そんな声しか出せない、それくらいの驚き。

「アレンさん、先に行かないで下さいよ。」

後ろからフィーの声、思わず走り出していたのだろう、後ろをみればゆったりと近づいてくるフィー、それを見ながら、ある程度近づいてきたフィーにむかって頭を下げた。

「…ありがとな。」

単純なお礼の言葉なのに、フィーは満面の笑みを返し、

「気にしないで下さいよ、とある少女のおせっかいってやつです。」

そうやってニコリときれいな笑みを浮かべる。
そうか、と小さく返答し、

「だけど、それでもありがとう、君がいなかったらどうなってたものか、いつか借りを返すよ。」

そういえば、フィーは困ったような笑みを浮かべる。

「別に、いいんですけどね…まぁ人の行為はむげにはしません、期待しないで…っていうとなんだか失礼な気もしますが、待ってますね、ではまたお会いしましょうね！」

そういえば、フィーはニコリと笑って路地へと引き返していく、一人で大丈夫だろうか、なんて思ってはみたものの、通ってきた道は意外と治安はよさそうだったしおそらく大丈夫だろうと思って俺は手をふって見送った。

フィーが見えなくなったことに、俺は見ていた方向と反対の城へと向き直り、大きな門へと歩いていく。
いたのはゴツイ…お兄さんとおじさんの中間くらいだろうか？
こちらをみつけ、2、3歩近づいてきたので、俺も近づいていくことにする。

「止まれ」

距離からして4メートル程度だろうか、それくらいで静止を命令されたので止まる。

「なにようだ。」

「…求人を見てきた。」

そういうと、納得したように頷き、俺の目を見てくる。

「ふむ、敵対心というのを感じられないな、城下町の門番とであったか？」

「はい、羊皮紙に血をつけましたが…」

「わかった、通そう、ついてきてくれ、城の裏手から入れる場所がある。」

そう俺にいうと、男性はこちらに背を向ける……信じてくれたということだろうか？

まぁここで問答しててもしかたないと思い、その背中を追った。

「んで、お前の名前は？おっと、いけないな、まずはじめに俺からだ…俺の名前はアルバート、よろしくな。」

「はい、よろしくお願いします。アレンです。」

「アレン、か。ま、正式によろしくなのは合格してからなんだけどな。」

…合格？何か試験でもするのだろうか…そうすると困るぞ、俺は文字すら読めない。

どうする、どうすると焦っていると、アルバートさんが止まったので俺もすぐに止まった。

そしてアルバートさんは茶色い扉へと指を指す。

「ここだ。」

木彫りのみすぼらしい扉、さきほどの城門とは比べるもないといえるほど。
まぁそれも当然といってしまっては当然ではあるけれど。
アルバートさんはコンコンと木彫りの扉を叩いてみる、

「…合言葉を。」

「合言葉？そんなもん聞いたことないんだが。」

「アルバートさんですか、今開けます。」

「ちょ、ちょっとまて、合言葉ってなんなんだよ。」

…おそらくアルバートさんは本当に知らないのだろう、顔をみればわかる、合言葉と言われた瞬間に本気で焦っていたし、今の状態も本気で聞きたがっている。
だがそんなアルバートさんをよそに、木の扉は開いて、そこからでてきたのは薄紫色の髪色をした耳の長い少女だった。

「アルバートさん、今回はどういったご用件で。」

淡々と語る言葉には、経験者というか、なんだか人生を長く生きているような落着きを感じられる。

「あ、あぁ求人をみてやってきたやつを…っておいその前に合言葉ってなんだよ。」

「その後ろの方ですか、どうぞお入りになってください」

「あ、はい…」

「あ、アルバートさんはもう持ち場に戻ってください、出入りの邪魔です。」

アルバートさんが再度合言葉について聞こうと問うが、完全に無視をする。それどころか邪魔だから帰れ発言、まったくどうでもよさそうだ。

「っあ…あーわかったよ、いきゃーいんだろ。」

俺と話すときの言葉とはちょっと言葉が違う、この少女のほうがずっとフランクだ。つまりは信頼してるってことなんだろう。
頭を掻いて外へと出ると、声もかけずに少女は扉を閉め、こちらに向き直る。

「はじめまして、メイドのトゥーナです。」

「…は、初めまして、アレンと申します。」

そういって礼をした後に、まっすぐとトゥーナといった少女をみれば、トゥーナさんはまっすぐとこちらをみている。
見透かすような目…目をそらしたいが、なぜかそらしてはいけないような感覚に襲われ、まっすぐと見続ければ、トゥーナさんが目をそらし、こちらに背を向けて歩き始める。

「合格ですね、…見習いとしてですけどね。ではついてきてください」

「え？あ、ありがとうございます。」

言葉に詰まりながらだけども、ちゃんと返答を返し、その背を追う。
石でできた階段を上がり、少し歩くと錠のかかった扉が見え、懐から鍵を取り出して錠を外す。
金属音、そして錠は下に落ちる前にトゥーナさんの手の中に納まり、

「待っていてください。」

俺にそういって、トゥーナさんは入っていき、数分で戻ってくる。
パンッパンッと手にもっているものをはたきながら、こちらへと差し出す。

「…埃っぽいので洗っていただいたほうが良いですね。自分のことを管理することも使用人としての心構えです、自分で洗っておいてください。」

「あ、はい。」

埃をかぶり、黒を強調としている服は白っぽく見える。
それを受け取った時に埃が舞い散り、せき込むが、トゥーナさんはさっさと先に行ってしまったので、それを追いかけていく。

「使用人の部屋は基本的に数人で使いますが、あいにく一人になってしまいます。部屋はここの一番奥を使ってください。」

「はい。」

頷けば、ニコリとトゥーナさんが笑ったような気がした。

「では、明日から仕事にします。教育係の話は通しておくので、明日は教育係について紹介します。それからはそのかたの指示に従うように。服は洗っておいてください、まだ昼過ぎなので乾くと思います。今日は城の道筋などを理解するために、ある程度歩いたほうがよいでしょう。ですが迷惑はかけないように。」

「はい。」

すぐに頷き、トゥーナさんは短く別れをつげると歩いて行ってしまった。

それをみて、ふぅと息を吐いて自分の部屋と言われた部屋に鍵を使って入り、俺はふぅと息を吐いた。

「ま、うん、土台はできた…後でアルバートさんに剣でも教えてもらおうかな。」

俺はボソリと独り言を漏らすと、服を持って外へとでる。

職業に見習い掃除係が追加される――

第四話『双子の庭師』（前書き）

短いかもしれない。
２０００以上はあるけど…
いや、そんだけ書いてんのに一日すらたってないんだけどね

第四話『双子の庭師』

「……」

外を見れば、青い空、白い雲…というわけではなく、ちょっと鉛がかっている空が見える。
長ったらしい赤いカーペットの廊下の端っこを歩きつつ、ため息をつく。
その手には埃っぽいこの城の掃除係の制服。

「…なんだか…なぁ。」

勇者兼見習い掃除係、名はアレン、絶賛迷子である。

最初ばかりは、さがせば見つかるなどとたわけたことを考えていたわけだが、歩き始めて数分、確実に迷ったと理解した。
一度戻ろうか、と思ってはみたものの、戻っても現状は変わらないことに気付き、歩き続けるという選択しを選んだ、これがいけなかった。
馬鹿だった、俺が馬鹿だった、樹海に長さの限界のある紐を持って行って、その長さを気にすることなくずんずん歩いていくほどに馬鹿だった。
つまりは忘れたのだ、記憶できる長さを超えてしまったのだ。
簡潔にいうと自爆したのだ

「…うぅっ」

泣けるぜ、なんて思って誰かを探すが、誰とも出会わない、何かあるのだろうかと考えたが結局出会わないんじゃ考える意味もない。

気分は一人考えなしに外国に行って迷子になっている気分…いやほとんど同じだ。
――そんなときだった。
窓の外をみれば、綺麗な…花園、というものだろうか?、そこにあったのは花、花、花。
音で言うなら強調し合って美しい音色を奏でているといったところだろう、それほどに美しいものだった。
もしかして庭師がいるものだろうかと思って、窓にへばりついてみるとやはりいた。

「…いたぁ…」

涙がでそうだ、歩き続けてやっと人を見つけた。
さっきのたとえを続けるなら、外国にいって迷子になったあと、日本人をみつけたという感じだ。
すぐに周りを見回せば、中庭へと続く扉を3つみつけた。
豪華な扉とその先の扉、そして木の扉。
おそらく豪華な扉とその先にあるのは、おそらく偉い人が使うためにつくられたのだろう、そして木の扉は使用人専用、といったところか。
木の扉への道のりを考えて、歩き始める、勘だが、その勘も当てに

なったらしい、目の前には見覚えのある木の扉があり、それを抜ければ日の光がこぼれてくる。
扉をあければ、かすかな自然の匂いというのだろうか、すがすがしくもふわっとした匂いがした。

「うぉおおおお」

思わず達成感に満ち溢れる、正直はたから見れば変人だ。
空に向かってガッツポーズしてみる。
そしてすぐに本来の目的を思い出し走り出す、人影を探し、すぐにみつけた。
草陰からひょっこりとオレンジ色の髪が見える、その頭へと足早に近づいた

「あ、あのぉ…」

そう声をあければ、ひょっこりと男の子が草からでてくる。

「ん、あれ？誰か呼んだかな？」

そういって周りを見回し始め、横からひょっこりと女の子がでてきた。
背が小さいようで、それで気づかなかったようだ。

「あ、兄さん、あの方かと思いますよ。」

「あ、そうなのか、やぁこんにちわ、何かようかい？」

「兄さん、持っているものを見てください、埃っぽい制服です、おそらく洗濯場でしょうね。」

「ん、それっぽいね、そうなのかい？」
…俺を無視してズンズンと話が進んでっている。
まぁ、このおそらく妹さんの言葉は正しいのだが。
挨拶をされたというのに返さないというのはどうも礼儀にかけている気がしてならなかったのだが、やっとこちらの番がまわってきたらしい。

「こんにちは、アレンっていいます。そちらのかたがおっしゃるとおりに洗濯場を探しております。」

「うん、僕はウェイクっていうんだ。」

「私はガーネットです。」

「それで水場？」

「それならたしか、あの豪華なほうの扉から出て行って右に行き、まっすぐ行って三つ目の角を左にいけば、横に扉があるのでそこからでていけば洗濯場になります。」

「注意事項だけど、メイドさんたちがいたら彼女らに任せたほうがいいと思うよ、なるべくお願いという姿勢を崩さずに、それだと心象は悪くないし、そのうえ、ちょっとは仲良くなれるしね。」

そういって笑顔を絶やさずに少年少女は豪華な扉を指す。
…仲の良いご兄弟のようだ。

「…あの、つかぬことをお聞きしますが…」

「あ、敬語使わなくていいよ？」

「あ、うん、双子なの？」

いいといっているのだから使わないでもよいだろう、…まぁあまりフレンドリーにならないように気を付けつつも、だが。

「そうですね、一卵性双生児です。」

そういわれて、似ている理由がよくわかる。
オレンジ色の髪、ガーネットといった少女のほうが女性にみえるが、それをみたとしてもそっくりだ。

「へぇ、だから似てるんだなぁ…ありがとね。」

話を脱線させてしまったが、すぐに頭を下げる。
すると、頭に重さを感じ、思わず頭を上げると、ウェイクとガーネットが俺の髪をさわっている。

「…へ？」

見上げると、苦笑している。
…なにかあったのか？

「いや、ごめんごめん、黒髪ってみたことないからさ。ちょっと触ってみたくなってね」

「結構きれいでしたし。」

「あ、ありがとう。」

やはり黒髪は珍しいのか、そう再確認して、俺は礼をしながら豪華な扉から外へとでいった。

第五話『戦うメイドと暴走最強魔術師』（前書き）

申し訳ありません、遅れました。
昨日は帰ってきたところ、体温のほうが３８．４℃だったので、寝ていたのですが、起きたところ結構下がってましたので、書こうと思います。

第五話『戦うメイドと暴走最強魔術師』

廊下のカーペットを歩き、下の石のような素材でできている道を歩く。
大理石なのだろうか、その石は、たとえカーペットが上に置かれていたとしてもカツカツといい音が響き渡り、そのまま俺は言われたとおりに歩き続ける。

「よし。」

扉の前でちょっとガッツポーズ、長い道のりだったと遠い目をして思った。
扉に手をかけて、あける。
外に出たらしい、横をみれば水道場、石でできた水場だ。
そこにいたのはピンク色の…髪の名前などあまりしらないが、フワフワとした感じの髪をした少女、ポツリポツリと変なことをつぶやいている。

「ちきしょぉ…私は最強の魔術師なんだぞぉ…」

言葉を聞くに、魔術師なのだろう、自称最強…だろうが。
涙を流しながら、メイド服をきてぎこちなくも服を洗っている。

「私がっなんでこんなっことをぉうごぉっ！？」

「うるさい黙れ、力を入れるな破けるだろ。」

「うみゅぅぅぅ！」

騒いでいた女の子に、いつのまにかに現れた長身の茶髪で長髪の女性が一発拳骨を噛ます。ガコォンッという大きな音が響き渡る。…正直ピンクの髪色の少女が大丈夫か心配になったが、すぐに復活、…すごい音だったよな…？

「痛いよ、シーニャ…」

「自業自得だメルシア」

…この二人の名前だろうか、察するに、ピンクの子がメルシア、長身の子がシーニャだろう。
会話をしているのを、入り込むチャンスをうかがうために様子をみることにする。
すると、メルシアといった子がバンバンと服をつかみながらわめき始めた、

「だってだって！私魔術師だもん！すっごい魔法が使えるんだもん！みんな使えないような呪文も使えるんだよ！多重思考による高速構築や多重構築による同時魔法使用を使えるんだよ！？なんでそんなスーパー魔術師がここでメイドなんかやってるのさ！」

…何をいっているのかさっぱりというわけではないが、正直ほとんどわからない。
漫画の世界でいえば、たくさん魔法がつかえたり、すごく高速に魔法が使えたり、一度にたくさん魔法が使える…ということなのだろう。
レベルが高いことはよくわかったのだが、何故メイドをやっているのだろう？
おそらくあきれるように頭に手を当てているシーニャといった女性がいうだろうと思い、視線を向ける。

「お前はそれを使いすぎると脳がパンクして気分がハイになるだろう。それで昔森を消滅させたのは誰かな？それで魔法学院を追放されたのは。」

「はぐっ！？」

…森を消滅させた。使いすぎると熱暴走する人間兵器と、たとえは悪いが的を射ているだろう言葉を連想する。
それは…追放されるだろう。

「で、君は何の用だ？」

そんなことを考えながら様子を見ていると、こちらをみてくるシーニャさんがいる。
それに初めて気づいたのか、メルシアがバッとこちらを向いて顔を真っ赤にしていった。

「お、お前！はかったな！私の恥ずかしい過去をきいてどうするつもりだ！」

「は、はい？」

「忘れろ！」

「うぇっ！？」

顔を真っ赤にしながら、おそらく高速に被害妄想を膨らませているのだろう、こちらへとビッと指を指してくるメルシア…さん、それに驚き一歩退くと、メルシアさんは懐から杖を取り出す、おそらく

は魔法使いの杖のようなものだろう。
それを一瞬で想像できたから、驚きの声をあげ構える。
目の前に光る円が構成されていき、メルシアさんはぶつぶつと何かを唱えている。

「『多重思考化完了――高速構成開始』」

そういうと、体のまわりに一瞬で数個の円が発生し、内部で部分で気に文様が浮かべられ、それはメルシアさんの目の前で一瞬で一つの魔法陣として変化する。

「わっすっれ…ろぉぉぉ！」

叫びながらメルシアさんは杖を振り上げ、すぐに振り下げる。

「相変わらず構成の速さはすごい…が、まてメルシア！姫様に言われただろう！城の人に魔法は使うなと！」

「…あ…あぁぁぁぁぁぁ！」

驚きの声、俺に向かってくる光。

「遅いよシーニャアァァァ！」

メルシアの叫び声。

「うぉ…うぉぁぁぁぁぁぁぁぁ！」

叫ぶ、叫ぶ、世界が光に包み込まれ、ここに来るときの世界のような、放り出されたような感覚が発生する。

――そして…俺は…光に…飲み込まれていく

というわけにはいかなかったらしい

「どうする！姫様にどう言い訳をすればいいの！？」

「…正直に話すしかなかろう。」

「で、でもっ、魔術は完璧だよ！ブランクはあってもちょっとの記憶を消すのみにとどめてあるし、私だって人の生活がおかしくなるようなことなんてしないし！」

「魔術をつかったこと自体がダメなんだよメルシア…」

「う…衝動でこんなことをしてしまった…私は成長しない馬鹿だ…」

光が晴れると、何も変わらず俺は呆然と何かを話している二人の女の子たちをみている。

こちらには気づいていないらしい、シーニャさんはメルシアさんを

呆れながらも咎めているらしい、メルシアさんは涙目で膝と手を地について頭を項垂れている。

「あ、あのぉ…」

そんな二人に、少し退きながらも声をかけてみると、バッと二人ともこちらをむく。
その迫力にちょっと驚くが、手をヒラヒラとさせて無事をみせてみる。

「…メルシア、記憶に関する魔法は意識が数分くらい消えるはずだったが。」

「う、うん、私はその点の副作用は抑えてあるけどそれでも十秒以上はあるはずだけど…」

「では構成がおかしかったのか？」

「…シーニャもみたでしょ？構成は確実に間違っていなかった」

そういってとことこと近づいてくるメルシアさん、ペタペタと俺の体を触ってくる、それが妙にむずがゆくて、思わず後ろに下がってしまっていたが、それを追いかけてくる手はない。
メルシアさんのほうをみる、そうするとメルシアさんは呆然と言った表情をしていた。

「魔力の痕跡すらない…完全に無効化（レジスト）している…」

「！？、それは本当か？！」

その言葉の意味がわからなかったが、それをきいた後ろのシーニャさんが驚きの声をあげてメルシアさんに近づき、その肩に手を置き、メルシアさんを振り向かせる。

「…魔法にたいする抗力？…いや違う、魔法抗力なら削減する程度、記憶の変更などは細かいうえに高度だから完全に削除されるようなレベルなんて今まで…」

「メルシア…おい！」

「あっ、ご、ごめん…魔法が完全になくされていることは理解したのよ…じゅるり。」

…なんだ今、舌なめずりする音がはっきりと聞こえ、そのことに異常なほど鳥肌が立った。

「えぇと、なんていったっけ、私はメルシアよ。」

「あ、アレンです…メルシア、さん。」

「メルシアでいいよ、えっと、こっちが…」

「シーニャだ、メイド兼門番といった仕事内容をしている。私もシーニャでいい。」

「うん、シーニャは強いからそういった方面での相談があったら頼るといいわよ、魔法とかは私を頼ればいいし。おぉっと用事が思い出したわ、研きゅ…げふんげふん、掃除の続きをしなきゃ！」

「あっメルシア待て！」

そういえば、メルシアはダッシュで城の中へと消えていく、それを追いかけるシーニャ、だがすぐにあきらめてため息をつき、こちらをちらっとみてくる。

「…君も災難だな。」

そういってハァとため息をつく彼女、鳥肌はたって、なんとなく嫌な予感はするのだが、どういうわけだか理解できない。

「魔術師は好奇心旺盛なのさ、そのうえ…目の前に研究対象が現れた。」

「へ…？」

「やりすぎないように見ていくつもりだけど…うん、がんばってくれ。あと、もっていた服の洗濯はこちらでしておこう」

そう言われて、思わず手に持っているはずの感触がないことに驚き、下をみる。いつのまにか服は消えている。一瞬でとったのだろう、なんという速さだと感嘆しながらシーニャをみると、心配そうにこちらをみている。

「…それと、メルシアのやったことは報告するのか？」

心配そうに見てくる瞳を感じて、メルシアが心配なのかと少し笑い、首を横に振る。

「…立ち聞きしたのは事実ですから、いいませんよ。」

「…そうか。」

嬉しそうに笑い、こちらに笑顔で返してくる。きれいな笑顔だった。

「じゃあ、こちらは私に任せておきなさい、…メルシアはあとで拳骨だけど。」

そういってシーニャは恨めしそうにメルシアのおいていった洗いかけの服をみる、その光景をみて苦笑するしかなかったが、お言葉に甘えて俺は城の中に入ることにした。

いつもなら、普通に手伝うところだろうが、そんなことはしない、…余裕があればするのだ。

そう、余裕があれば。

「フッ」

ニヒルな笑みを浮かべて、俺は歩き出す。

――帰る道のりがわからない

第五話『戦うメイドと暴走最強魔術師』（後書き）

この世界での魔法式は、前のオリジナルは言葉による構築でしたが、今回は魔法陣による円の中に魔法式を構築し使うというものです。魔法使いに大体必要な杖は、記憶にある魔法式を思い出し、構築するもののようなものです。この世界では魔法はプログラミングのようなもので、ただの一本の線でも多種多様な用途があり、それを続きを書くことでやることを決め、それを発動するとそうなるようになる。

魔法陣は異常なほど細かいので、普通なら一つで１０秒以上構成をしなければいけない…まぁそれは完璧に覚えたけど経験がないってひとのみですけど。

メルシアは構築速度は１．２秒で構築します。

メルシアの多重思考の限界は４４１まで、はっきりいって異常です。しかし、それを全部使用すると暴走します。パソコンでいえば、大量に窓を開いて、それらで繊細さを問われる計算をしているようなものです。ギュインギュインと熱を吹き出しながらオーバーヒートでプッチンと電源が落ちますね、ハイ。

メルシアの記憶を消す魔法については、構築をいくつかに分けて、思考で分担し、高速で構築するといったやりかたをしました。

…設定つくったのは作者本人だけど、メルシアが暴走を克服したら魔術師一人が一つの魔法を打てる速度で４４１の魔法を放てるのか…なんという人間兵器。

さて、次は教育係との出会い…そして…ストックが切れるの巻

第六話『見習い本格スタート』（前書き）

ヤバイ、文章書いても続かない。その上にgdgd

第六話『見習い本格スタート』

脳に響く不快な電子音、それに煩わしさを感じながらも無視を決行すれば、俺の体をさする感触がする。目を開ければ見知った顔、見知った声、俺の部屋の白い天井をみて、会社をいかなければいけないな、などと思い、起き上る。

――そんなことは、もうない。

目を開ければ、知らない天井、一人ぼっちのベッド。
夢をみた気がする、懐かしい夢だった気がする。
――一日程度しか違わないというのに、どうしてこうも懐かしいと

いう感情が出てくるのか、わからない。
でもそれはきっと、過去のことだと考えなければ前に進めないのだろう。

…さて、頑張ろうか。

そう心で思い、ギシギシと鈍い音を立てながらベッドから降りて、まっすぐ立ってまっすぐ伸びをした。

「んぁ…くぅ〜あ」

ぐわっとくる爽快感を感じつつも、おそらく洗っておいといてくれたのであろう、使用人の服を手に取り広げる、しわひとつないその服に袖を通して、首をぐるぐると回し、リラックスする。
そしてすぐに頬を叩き、気合を入れて俺は歩き出す。
すでに昨日の晩御飯の時に挨拶は済ませたから、今日は円滑に話が進むだろう。
…そういえば教育係って誰なのだろう
そんなことを考えながら向かう先は扉だ、一歩開ければ仕事モードにきっとなれるだろう。
そう思って扉に手をかけ

「うヴぉぉっ！？」

突然開いた扉にぶち当たる。
痛い、なんでだろう体は全く痛くないのになぜか痛い、あれか、ゲームとかに『痛い』とかいってしまう反射的な感じか。

「っつ…」

思わずあたった額を抑えながら、誰だよと思って扉を開けると、その先にいたのはオレンジの髪をしたメイド服の少女…が倒れていた。

「いたた…立てつけが悪いのかなぁ？」

おそらく、あれだろう、開くものだと思って突っ込んでいったら開かなくて、それにより開かない扉に突っ込んでぶち当たってしまったとかいうのだろう。

起き上ってこちらをみた少女は、こちらをみて目を丸くした後、ちょっと恥ずかしそうな顔をして、すぐに笑った。

「はっずかしいところをみせたね！僕はウィルラっていうんだ、ウィルって呼んでね！」

「あ、アレンです。」

そう元気に笑っていう少女…名前によりちょっと自信がなくなってしまったけれど、きっと少女だ、うん違いない。

笑顔にドキッとかしてしまって現実逃避なんてしていない、この子は女の子だ。

「ついでに男の子だよ！」

…何かが壊れた気がした。

だがおかしい、男の子がメイド服なんて普通着ない、女装などに興味がないわけではないが、着ようとは思わない。

…そういった趣味なのかもしれないけれど、とりあえず聞いてみることにする。

「…なんでメイド服を着ているんだ？」

「あぁ、それは簡単だよ、趣味さ！」

趣味らしい、似合ってるからまぁいいか、なんて思わないけど、一々『変態だー！』などということでもない、趣味は人それぞれだ、似合ってるからまだマシだし。

「…昨日の晩御飯のときにいた？」

…そういえば昨日見たことがないと思って聞いてみる。

聞いてみると、コクンと一回頷いた後に口を開いた。

「うん、そうだね。昨日は実家のほうに帰っていたからね。メイド服で。」

…それはいかがなものかと思われる、親が泣いていないのか。

そんなことを思ってウィルをみていると、ウィルは懐から懐中時計を取り出して声をあげる。

「朝食まであと五分しかないよ！すぐにいこう！」

「あぁ」

そういって俺の手を握り走り始める。

そう、我が職場にて朝昼夜と飯の時間帯は決まっている。

決まっているといっても、込み合うのはいけないので二つに時間を分けて食べているが、俺の時間帯は早いほうのものだ。

時間が決められているせいか、結構高いものなのだろうけど、俺たち使用人には懐中時計というものが手渡されている、城は偉大なものなのだな、とちょっと思った。

食堂にて、十四人ほどの使用人が席につく。

「昨日もいったが、今日からアレンくんが入ることになった。」

昨日も軽い自己紹介をしたのだが、もう一度するらしい、今日からというところが大切だそうだ。
紹介されて、前にたち、軽い自己紹介を始める。

「アレンといいます、今日から――」

軽い程度なので、二分程度で終了させてペコリと礼をすれば拍手を返されて、職場に関しては不安は少なくなったと思う。
本格的に始まりなんだなと席に着き、朝食を食べながら思う、朝食に関しては別に前世のほうと同じだ。
目玉焼きにサラダにパン一つ、同じとはいったが、メニューが同じだけで量は少ないものだ。
それをペロリと平らげて、立ち上がる。
向かう先は掃除係組がいる場所だ、昨日言われていた上に生き方まで教えられたのでちゃんとつけた。

いたのはウィル、そしておどおどした男の子、そしてなぜか高笑いしている女性。

「あ、あのぉ」

「ふっはっはっは！城の品格は私が保つッ！」

「ちょ、ちょっと聞いてください！」

「私こそ、すべての王から来てくれと願われる掃除の王なりィィィ！」

…大丈夫だろうかこの人。

高笑いしている女性を無視して、ウィルのほうにいくことにする。

近づいてみると、外をじっとみて暇をつぶしているようだ、とりあえずおどおどした男の子をみる、…下を向いている。…大丈夫か掃除係。

「はっはっは、は…あ、新人？」

どうやら気づいてもらったようで、ちょっとホッとする。

おそらく食堂で名前は聞いているだろうが、再度自己紹介をする。

そうすると、女性はうんうんと頷き続け、ニコリと笑いかけてくる。

「私の名前はシャルロッテさ。シャルロッテか掃除王と呼んでくれ。」

「シャルロッテさんよろしくお願いします。」

「うむぅ…誰も呼んでくれない。」

でしょうね、などとは言わない。

「さて、アレンよ、このおどおどした男の子はザンバルディアだ。」

「ざ…ザンバルディアでしゅ…す…よ、よろしくお願いしま…す。」

おどおどしながらザンバルディアは自己紹介をしてくるので、頷いて自己紹介を返す。

口元が笑ってくれたので、信用し始めてくれたのかもしれない。

「ザンバルディアはとてつもないくらいに名劣りしてると見た目で言われるが掃除能力は私の次にすごい、超高速雑巾乱舞は光を超える。」

見てみたいと純粋にそう思った。

そして次にウィル

「自己紹介は朝したよね？ウィルラだよ、ウィルって呼んでね。」

「あぁ、ウィル、よろしくな。」

この場にいる人たちとは挨拶しただろう、シャルロッテさんは俺たちの背中を押して無理やり整列させると、俺たちの前にくる。

「えー、掃除係初心者もいるからこそ言っておこう、掃除は使用人全員でやると思っている人もいるかもしれないが間違いだ。少なくともこの城では使用人は部屋の掃除しかやらないようになっている。そして専門として掃除係がくる、やる場所は…王の間、これをいつ何時誰がこようとも美しくきれいに仕上げるのが掃除係ッ！…そぉ～う、考えろ、汚い玉座など見るに値しないッ！われらにとって仕事とは、玉座を永遠の美しさともいえるほどの美しさに仕上げることだ！」

そう誇りをもって胸をはって演説のごとく言い放つ。
何か覇気がみえるが、ここまで本気でやっているのかと思って、自分も頑張らねばと気を引き締める。

「アレンッ！新しき掃除戦士よッ！お前の教育係は私だ！心してかかれ！返事は！？」

「ハイッ！」

「OK、ではいくぞ！出陣じゃあああああ！」

…やっぱりテンションがおかしいと思うのは今から数分後のことだった、。

第七話『村』？（前書き）

…牧場物語シリーズが大好きですが
ルーンファクトリー４は３ＤＳででちゃうんですかね…
あのレベルのグラフィックでやることがおもしろいんですが…

第七話『村』？

――唖然
目の前の光景に呆然自失しかできないことが悔やまれる。
物理法則を無視した状態を維持する彼女――シャルロッテ

「真・雑巾乱舞ッ！」

どこが真なのかなんて知る機会はないんだろうな、と思いながら俺はその背中を見つめ続ける。
…彼女は一度も地面に足をついていない、まさに飛び回る…いや飛んでいるのだ、クルクルと回転しながら。

「あ、シャルロッテさんは魔法使いだよ、複合系に強い。」

「複合系？」

「ん？いくつかの魔法を組み合わせて威力を上げるんだよ。メルシアさんも多思考による高速展開というものが可能だけど、そういったものがない癖に普通と変わらない精度で展開させるんだ。いってしまえば経験の賜物ってやつだね。」

――経験のたまもの、メルシアの最強魔術師、…この城の住民は妙に濃い気がする。
というか経験って何をやっていたんだシャルロッテさんは

「あ、シャルロッテさんは昔傭兵だったらしいよ、それも凄腕の。」

「…えぇっと思考を読む魔法は？」

そう聞くと、ウィルはアハハと笑って首を振る。…どうやらないらしい。

「だいたいこの話をするとみんなどんなやつなんだーって顔をするからね。」

「…みんなってことは城にいる人は？」

「うん、みんな知ってるよ。それでいてシャルロッテさんは面倒見がいい人だからね。結構慕われているよ。」

そういって笑うウィルをみながら、ちらっとシャルロッテさんをみる。

――回転しながら回っている、なんかシュールだ。

だけど空中浮遊の魔法ってなんとなく気持ちよさそうだな、なんて思っていたら、シャルロッテさんが地面に足をつき、こちらにやってくる。

「さて…みたね、アレン…ならばやってみるがいい」

「うん、それ無理。」

「…むぅ、絶対にそう返されるぞ。」

…でしょうね、なんていわない。

――1時間後

「完璧だ、時間短縮は12分、それでより早くきれいになった…アレン、君には期待している。」

反応に困る言葉をシャルロッテさんは俺に向けて言い放つ。

…がんばります、か？それとも精進します！か？

今回驚かせてもらったのはザンバルディアの動きだ。

光の速度を超える雑巾捌きというものはなかったけれど、それでも驚いた。

的確に掃除をしている、俺もがんばってみたが効率は彼にかなわない。

手をみせてもらえば、ひび割れができ、荒れていた、努力の成果だろう。

才能もありながら努力する、そしてこの効率。

――なんだか格好良い。

…でもうらやましくない、なんでだろう

「終わったし、次は王様と姫様の部屋ね…」

そうポツリとシャルロッテさんが漏らしたときに、コンコンッとドアをたたく音が玉座の部屋に響き渡る、この場にいるすべての人が

そちらに目を向けると、ドアが鈍い音を響き渡らせながら開いた。
「あ、トゥーナじゃないか、どしたの？」
フレンドリー、というか知り合って長い友人に語りかけるような口調、相棒といった感じだろうか、その声を聞いて、トゥーナさんはこくん、と一度頷くと口を開いた。
「いえ、ちょっと問題が起こったので掃除係兼問題解決班であるシャルに行ってもらおうかと。」
シャル、おそらくあだ名みたいなものだろう、結構友情が深い感じに見えるし聞こえる。
…そうなるとトゥーナさんってどんな人なのだろう。
「…いつなったかはわからないけど、傭兵って感じでお願いされるわけね。わかったわ。あ、でも王様の部屋と姫様の部屋はどうなるわけ？」
「それは大丈夫、もうメイドの手配はした。行く場所は一つ山を越えた村、それと、アレンくんもついていってほしい。」
コチラとみて、言ってくる。
ちょっとだけシャルロッテさんが困ったような顔をする。
「…数が多いなら荷馬車でももっていけばいいし、魔物がでたら素人は足手まといだと思うけど。」
「今回は、アレンくんはシャルの代わりにいくかもしれないということを想定しているの。男手で、ある程度強そうというのは彼だけ

だから。」

「…ま、たしかに彼は妙に才能がありそうだけどさ、それでも素人じゃない。」

こちらをちらりとみて、そう言い放つ、気遣ってか、小さな声でだが、自身の聴力に関しては自分がよくわかっている、完璧に聞こえている故に、ちょっと肩を落とした。

…だが、才能がありそうとはどういうことなのか

「いえ、素人だとかはいいのです。最近魔物がこの近辺にでていないということにより、道のりなどを知っておけば後々に役に立つということを思ってが一番に来ます。」

そうトゥーナさんがいえば、シャルロッテさんは驚いた顔をした。

「…魔物が近辺にでない？」

「そう、報告がされています。」

「…気味悪いよ、それ。」

「…そうですね、何か準備をしてそうな気配がありますが…それは置いておいて、現状は安全です。」

「ふぅ、まぁいいさ、アレンは旅をしていたって聞いたし、ある程度の危険なら潜り抜けているだろ。」

…嘘ですなんて言えないために黙ってみている。

トゥーナさんはその言葉にコクリと頷くと「後で裏口のほうで」と

言い残して帰って行った。
そうすると、シャルロッテさんはこちらを見て、
「さって、アレンは私と来て、それでウィルとザンバルディアは姫様と王様の掃除へ、メイドさんたちが手伝いに来てくれるんだってさ。いつも通りにやって、終わったら各自解散ということで。」
わかりました、と3人が答え、俺がシャルロッテさんについていく。シャルはこちらに手を振って、ザンバルディアは礼をしてくれたので、二人に手を振って俺はシャルロッテさんへと歩いていく。
そして裏口への道を歩いていく。…当然のことながら道はあいまいにしか覚えていないために背をみながら歩いていく。
「…聞こえてた？」
「あ、はい、えっとどっかにいくってことはわかりました。」
「村、名前は『アルザック村』小さな村なんだけどねぇ、野菜がおいしい村よ。」
「えっと、食材をとりに？」
「まぁ、ほとんどそうだけど…ちょっと気になることがあるんだ。魔物が近辺にいないこと。」
「それが？」
「…村で話を聞くの、近くの町にもいっているだろうから、あの村の人は。その近くでも魔物がいませんか？って。」

そういって、少々不安そうな顔をして、シャルロッテさんはコツコツと足音を響き渡せて裏口へと急ぐ。
近くまでくると、ひょっこりとトゥーナさんが顔をだし、こちらへと手招きする。
そちらへと歩いていると、トゥーナさんから一振りの剣をもらった。

「護身用、シャルは一本持っているからいいとして、気を付けるように。お金は今シャルに渡した」

そういわれて、コクリと頷けば、シャルロッテさんとともに裏口へと向かう。

この出発により、色々なことを知るということは、今の俺には知る由もなかった。

第七話『村』？（後書き）

次は人物紹介とともに、世界観設定を書くつもりです。

第八話『村？』（前書き）

…世界観とか、キャラ設定とかいってみたけど、さすがに続きを書くことにしました。

…でもね、でもね…世界観が独特過ぎてさっさと教えないと変になる…

第八話『村？』

馬や人、たくさんのものたちが踏みしめたおかげで道ができたのだろう、草原にポツリとあった道を歩き続ける。
道路は舗装されているところはあるが、舗装されないところのほうが多いらしい。
途中フィーに会えるかな、と期待してみたが、そんなことはなかった。

「アレン」

そんなことを考えていると、シャルロッテさんの声が聞こえて、振り返ってみると、もろに『暇だ、かまってくれ』という顔をしたシャルロッテさんがたっていた。
わかりやすさに吹き出しそうになるが、とにかくこらえてまっすぐにシャルロッテさんをみる。

「シャルロッテさんってトゥーナさんとどんな関係なんですか？」

だからこそ、聞いてみる。気になってたことを。
そう聞いてみると、小声で「しかたないなぁアレン」は、などとシャルロッテさんがいったが、絶対に突っ込まない。

「ふっふぅん、聞いて驚け見て笑え！」

…何を見ろというのか。

「トゥーナは私の師匠だッ」

…そう、あいb…

…

…

…え、ちょっとまって

「…何歳なんですかトゥーナさん。」

「さぁ？」

「いやさぁじゃないですよ！？師匠って、あった時トゥーナさんはどんなんだったんですか！？」

「うぅん、変わらなかった気がする。」

変わらない、変わらない、変わらない…だと…？
何度も何度も同じ言葉を頭に浮かべて、聞いた言葉を間違いじゃなかったと理解できた。
何度も確かめなきゃわからないほどに、意外、いや意外とかいっているレベルじゃない。
激しく気になるが、本人に聞くのはちょっとダメだ。
夜、気になって眠れなさそうだなとちょっと思った。

「ていうか、なんで師匠に呼び捨てなんですか？」

「んぅ…見た目でね、うん…」

「あぁ…」

見た目を思い出す、こじんまりとした体格、正直年齢は２０歳そこらだと思っていた。
背筋もピンッとしているし、不思議なオーラだけどそこにはたしかにカリスマ性というものを感じられる。だからこそ昔からここでメイドとして使えていた、なんて想像をしてた。
…い、異世界だなぁ
なんだかちょっと苦しいかもしれないけど。

「出会いはどこなんですか？」

気になりすぎて思わず探るような言葉を吐いてしまったとちょっと後悔する。
だが、いってしまったものはしょうがない、言葉を濁してもその後の空気が悪くなるだけだ、怒られたりしても受け入れる。
そんなことを思っていたが、シャルロッテさんの顔は笑顔だった。
…でも、言葉は重かった。

「炎の中だよ、私の村燃えちゃったんだ。母さんも父さんも、私を窓から逃がして、自分は逃げられなくて、嫌がる私を無理やり逃がしたんだよね。」

そういって笑う。
シャルロッテという女性の強さというものを感じてしまった。

「それで…あったのがトゥーナ、炎の中、燃える家を見ながら呆然とする私の手を引いてくれたってだけ。」

…その言葉は嬉しそうで、ずっと笑顔だ。
ちょっとだけほっとしたけど、…親が死んで悲しくないのだろうか。
…いや、悲しいんだろうな、それでもトゥーナさんの出会いは、それ以上に楽しかったのだろう。

「でさ、トゥーナってひどいんだよ？痛いげな子供に―――」

得意げに語るシャルロッテさんをみながら、俺も自然と笑顔になっていた。

「…そういえばアレン、戦ったことある？確実に体はすごいのはわかるんだけど、なんていうか、経験？そんなものが見えないの。」

「…戦ったことはありませんね、喧嘩はありますが。」

高校生時代に少しだけした。
慣れてなくておそらく不恰好だったが、殴り合いで勝利した記憶を持つ。

「ふぅん、だったら帰ったら教えてあげるよ。」

その言葉は最高だ。アルバートさんにお願いしようかなと思っていたが、話を聞く限りにシャルロッテさんは強い。強い人に教わったほうが上達は早いだろう、…教えるのが極端に下手でなければ。
そう思ってみて、ちょっと怖くなったのは俺だけの秘密。

「本当ですか？お願いします。」

「うむうむ、シャルロッテお姉さまに任せておきなさい。」

「はい！シャルロッテお姉さま！」

「…やめてくれるとうれしいな。」

…だったら最初からいわなければいいのに

そうこうして歩いているうちに、風車が見える。
風車をさしてシャルロッテさんは目的地だと教えくれた、風車なんてみたことがないので、物珍しさを感じながらも、シャルロッテさんの後ろをちゃんと歩いていく。
ちょっと歩いていけば、木の看板、そこにはシャルロッテさんに聞いた通りの名前が書いてあった。

「ようこそ、アルザック村へ！」

「どっかのＲＰＧの村人Ａみたいなことをいいますね。」

「…アァルピィジィ？」

「…忘れてください」

思わず突っ込んでしまった言葉にハッとした。

…まだ前世というものを引きずっているらしい、シャルロッテさんが反対を向いている間に思い切りパァンッと顔を叩いて心に教え込む。

シャルロッテさんが心配そうにしてきたが、大丈夫とだけ返してもらった。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n2763t/

君の幸せを信じて

2011年10月6日17時54分発行